

■■ 「しゃち」と七人塚 ■■

しゃち

前言った「しし祭り」または「ぶしゃ祭り」と称する行事を、一方「しゃち祭り」と言ったことについて、「しゃち」の語の一般伝承にあるものを一通り拾い出して見る。

この地方では、狩人が獲物に遭い、狙って放った矢丸が、命中すればこれを「しゃち」または「さち」が向いたと言うに反して、外れることが度重なると、その物の具は「しゃち」が切れたと言って、新たに「しゃち」を継がない限り役に立たぬとしたのである。

「しゃち」は一種の靈威のようなもので、すなわちその道具に、一種の魅力を認めていたのである。それで「しゃち」を継ぐ方法としては、一般に禰宜を頼んで祓いをするか、または鍛冶屋に持ち込んで、火にかけ祓いをしてもらうとも言うが、その方法等はまだ究めておらぬ。

この「しゃち」が切れたと言うことについて、面白い実話がある。北設楽郡豊根村分地の現村会議員佐々木氏の談であるが、同氏少年の頃だそうである。一日父に伴われて山に行くと、途中に見知りごしの男が傍らに鉄砲を置いて草を刈っていた。折からそこへ一匹の野兎が走り出たのに、それと見た佐々木氏の父は、かねて評判の鉄砲上手だったので、すぐその道具を借り受けて兎を追っていった。そうして続けて二発放したそうであるが、どうしたわけか命中せず、しかも兎はなおつぼき（刈干の草を束ね稲叢の如くしたもの）の傍らに姿を見せていたが、しかしもうそれを狙おうともしないで、鉄砲を元の位置に返ししながら、惜しいことだがこの道具は早「しゃち」が切れてしまった、自分が継ぐ術を心得ていれば進ぜるのだが、何とも致し方ないと繰り返し言ったそうである。

しゃちだま

「しゃちだま」というのも、前と道理は同じであるが、これは銃身ではなく丸を指すので、すなわち獲物に向かって第一に命中した丸を言うのである。あるいはその丸を獲物の体内より抜き取り、今度丸を鑄るとき、材料の中に加えて作ったものをも言う。現今ではもうこうしたことをするものもなくなったが、ここ三、四〇年前までの狩人はこれを珍重したのである。静岡県地内磐田郡竜山村字戸倉の、桔梗屋という家の主人から聞いたところによると、同氏が子供の頃、その父が丸を鑄るとき、別にたいせつにした丸があって、それを坩堝の中に加えるのを見たそうであるが、それは獲物の体内から抽出したものだと言う。

しゃち祭り

「しゃち祭り」と言うのは、狩人が獲物にありついた時、第一に山の神を祭る、その名である。その作法は人によっていろいろあり、必ずしも一様ではない。たとえば丸の命中した部分の毛を剪り取り、それを岩の上または矢串に挿んで祀ることもあれば、一方臍腑を抜いて、これを木の枝または串に挿して祀る。または鹿ならば胃の脇にあるという「やぶかけ」をもって祀るもあり、耳を切って串に鋏むもある。また前記戸倉で聞いた話では、別に赤紙をもって烏帽子の如き大きな幣を作り、これを岩の下または崖の根等に立てて祀った。ちなみに岩または崖の下等は、神を祭る場所として一種の伝承があったのである。また「しゃち祭り」の一形式として、周智郡水窪町の山地等では、赤色の紙を長方形に小さく截り束ねて、これを小高い地点から風に向かって飛ばしたものと言う。

五色の幣

花祭り、御神楽等の行事には、五色の紙をもって幣を作り、その他すべての祭具にこれを用いるが、これは山の神を初め、路傍の祠等にも、祭りにはすべてこれを立てるのである。三河の富山村付近においては、これを「そぶかえ」といって、隔年に地内の祠山の神の祠等に立てるのである。下津具村字落合〔現、津具村〕の佐々木今朝十という老狩人の談であったが、少年の頃、遠江周知郡の竜頭山に狩に入って、はるかに奥の山裾を眺めたとき、粗末な小屋が幾軒となくなっていて、その屋根、軒端等に五色の幣帛が美しく翻っているのを見たが、これはいずれも獵師小屋だと、同行の先輩が教えたそうである。

しゃち山の神

しゃち山の神または獵師山の神などと言う。ともに狩人の祀る山の神の名である。これは一方狩人の霊を祀るものとも言う。

七人狩人

しらくら
遠江磐田郡竜山村大字白倉は天竜川の西岸に聳えた白倉山の麓にある部落で、この付近においてはもっとも奥村である。土地の草分けを青山某と言って、同所に金山明神を祀ったものという。ちなみに金山は滝を祀る。この白倉山中に南沢 みなみざあ という深い山があるが、ここに七人狩人の墓という塚がある。別に「七人みさき」また七人塚とも言う。伝説によると昔七人の狩人が連れだつて南沢に入り込んだまま還らず、ついに行方が知れずに終わった。山が深いので路に迷い飢死したものとして、塚を築き七人のみさき（霊）を祀ったものと言う。また別の説では後に七人の死骸を発見し、塚を築いたとも言う。よってこれを山の神として、かねて狩人の守り神として祀っている。

狩人七人に犬七匹

狩人七人の墓を七人塚という一方、前記白倉とは山を隔てて反側、すなわち北方に当たる浦川村地内〔現、佐久間町〕の狩沢^{かれんざあ}という山には、昔から一本足の怪物が棲むと伝えて、ここも山また山の奥であるが、ここにもまた七人の狩人を祀るという七人みさき、また七人塚と称する塚がある。そしてこれには別に犬七匹もともに死んだと言って、塚の脇にその霊が祀ってある。

七人落ち

三河北設楽郡振草村古戸と園村足込との地境にある字黒畑^{くろばた}にもまた七人塚称する塚があるが、これは別に七人衆ともまた七人落ちとも言い、狩人の守り神として、鉄の弓矢を奉納する風が盛んであったと言うが、言い伝えによると、昔七人の狩人が猪を捕らえるとて「おす」と称する罾を掛けた。「おす」は材木を組み合せ、その上に大石をおいて、餌を引く猪を圧殺する仕掛けであるが、七人の狩人が、どれだけ重いものか試してみようと言って、それを昇ぎ上げたところ、重量に堪えかね、たちまち七人とも押し潰され命を墮した跡と伝えている。

七人落ちまた「七人おとし」とも言う塚は、古戸より山を越えた上津具村大字油戸字千間谷〔現、津具村〕と称する山にもあって、ここもまた七人の霊を祀るという。^{ゆと}

なお、七人狩人、七人みさきの墓と称する塚は、この地方に自分が知るだけでも左の如くある。

- | | | |
|---|-------------------------------|------------|
| 一 | 振草村大字平山字黒倉〔現、設楽町〕 | 七人塚 |
| | 戦争の落武者七人の墓と伝え部落の中央にあり | |
| 二 | 同村大字小林字檜橋〔現、設楽町〕 | 七人塚 |
| | 来由不明 | |
| 三 | 同村大字古戸字日陰〔現、設楽町〕 | 七人塚また七人みさき |
| | 山伏七人の墓と伝え、塚の長さ六間あり、明治四〇年頃発掘せり | |
| 四 | 本郷町地内〔現、東栄町〕 | 七人塚 |
| | 場所精確に不明 | |
| 五 | 園村大字大入〔現、東栄町〕 | 七人塚 |
| | 同所花山字一方裏手岩石面にあり | |
| 六 | 豊根村大字古真立字分地 | 七人塚 |
| 七 | 同 曾川 | 七人塚 |
| | 共に来由不明 | |

八 豊根村市原

七人塚

昔戦争の折討死せる者の墓と言う

九 遠江周智郡水窪町大字戸中〔現、磐田郡水窪町〕 七人塚

来由不明なれども、同所は戸中山御料林中の深山にて、足利時代覚伝といえる山伏の入って住みたる地と伝え、また伊東長者の屋敷跡という地点である。